

時間の経過の改訂主義

梶本 尚敏 (Naoyuki Kajimoto)

所属 シドニー大学

マクタガートの時間の非実在性の証明以来、現代の分析形而上学の時間論は大きく分けて A 理論と B 理論という二つの立場によって論争が繰り広げられてきた。A 理論と B 理論の対立点は多岐にわたるが、その中心となってきたのは「時間の経過は実在するか」という論点であろう。すなわち、A 理論が時間の経過についての実在論と特徴づけられるのに対し、B 理論は時間の経過についての反実在論として特徴づけられてきた。しかしながら、近年一部の B 理論者たちは B 理論においても時間の経過は実在すると主張している。例えば、Oaklander (2012)、Dorato (2006)、Savitt (2002) は時間の経過は「～より前/後である」のような B 関係にたつ出来事の継起 (succession) に他ならないと主張しており、Maudlin (2007, p. 109) も時間の経過は内在的な非対称性に他ならないと主張している。

こうした一部の B 理論者の主張は時間の経過の改訂主義とも呼べる立場だが、これまでのところ広く受け入れられているとはいえないように思われる。その最大の理由として、「時間の経過が実在するためには、今の移り変わりとともに実在そのものが変化する必要があるのであるように思われる」というものがあげられる。例えば、A 理論の一つである現在主義であれば、2000 年が今であるときには 2000 年の存在者のみが実在するのに対し、2019 年が今であるときには 2019 年の存在者のみが実在する。他の A 理論である動くスポットライト説や成長ブロック説も同様に、今の移り変わりとともに実在そのものが変化するということを受け入れる。しかしながら、過去・現在・未来が実在すると考える B 理論においては今がどこにあろうとも実在そのものにはいかなる変化も起こっていない。これが一部の B 理論者が提案する時間の経過の改訂主義を受け入れがたいものにして最大の原因だと思われる。

本発表ではこうした「時間の経過と B 理論は両立可能である」という時間の経過の改訂主義を擁護する。これにあたり、発表者はまずある存在者が時間の経過とみなされるためにはどのような役割を果たす必要があるかを分析したうえで、時間の経過についての機能主義を提案する。そのうえで、もしこの時間の経過の機能主義を受け入れるのであれば、一部の B 理論者が主張する出来事の継起や内在的な非対称性も時間の経過と見なされうり、それゆえ時間の経過の改訂主義も受け入れられるべきだと主張する。時間が許すのであれば、時間の経過の機能主義の積極的な擁護も行っていきたい。